
ポケットモンスターDPT ~輝石の蒼光~

danlick is immortal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターDPT ～輝石の蒼光～

【Nコード】

N3736W

【作者名】

d a n l i c k i s i m m o r t a l

【あらすじ】

これはポケモンたちの住む世界を旅するトレーナーの一人となった少年

『ヒロト』が自らの夢のためにシンオウ地方を旅していく物語である。

プロローグ（前書き）

初めての小説です。

初投稿を誕生日にしていきなり調子に乗っています…

とてもひどい内容になるかもしれないかもしれませんがどうか温かい目で見ていただけるとうれしいです。

それではスタートです！

プロローグ

ここはポケモンと人間達がいる世界

この世界にはきつと数え切れないほどポケモンがいるかもしれない人間とポケモンは協力してずっと今日まで生きてきた。

ここ、シンオウ地方のマサゴタウンに住む少年が今大きな人生の一步を踏み出そうとしていた。

「これで良しと…それじゃあいってきますー！」

「がんばるのよー！ってらっしやい」

母親にいつてきますを言つて家を出たこの少年、名前は『ヒロト』
夢はあのチャンピオンマスター『シロナ』と戦い、そして勝つことである。

ヒロトは町にあるナナカマド研究所まで走り出した。

プロローグ（後書き）

こついう感じでやっていくので最後までよろしくお願いします。
だんだん文も長くしていきます。

次回もお楽しみに

ポケモン初ゲット!! (前書き)

まだまだですがよろしくお願ひします。
それでは第二話スタートです!

ポケモン初ゲット！！

ヒロトは研究所へ走り出そうとしたが

「ヒロトー忘れ物してるわよ」

母親に呼び止められ玄関へとんぼ返り。

「どうしてこれを忘れるかな」

「ごめんごめん」

そういつて母親からきれいな青い石を受け取ったヒロトはそれを大事そうに首にかけ、今度こそ研究所へ走り出した。

しかしヒロトの向かっている方向は研究所ではなく海のほうだった。

「おーいブイゼルー！出発するぞー！」

海岸に着いたヒロトはそう海に言った。

すると海からポケモンが現れた。そのポケモンはブイゼル。

だが、このブイゼルはほかのブイゼルと違ってなんと尻尾が3本あるとても珍しいブイゼルなのだ。

「あつヒロトとブイゼルだ！おはよー」

元気のいい挨拶をしたこの少女名前はアスカ。

「おはよう。ちよつと遅いんじゃない？」

そしてこの少年はジユン。

2人ともヒロトの幼馴染だ。

「おはようヒロト君」

ナナカマド博士もそこにいた。

「さあ皆そろつたところで研究所に入ろつ。」

博士がそう言ったがヒロトが

「ちよつと待った！皆には俺の初ゲットを見てもらいたい」

そう言った。

すると3人とも

「却下」

「異議あり！何でそうなるの？」

ヒロトは某裁判ゲームのごとく突っ込んだ。

「あはは。ちよっとポケただけさ。」

「さあ気を取り直してゲットだ！」

そう言ったヒロトはバッグからモンスターボールを出した。

「そういえばどのポケモンをゲットするの？」

とアスカが言った。

「俺がゲットするのはもちろんブイゼルさ！ブイゼルいいよな！」

「ブイ！」

「よしいけっ！モンスターボール！！！」

「やった！初ゲットだ！」

「おめでとう」

そう皆が祝福していたら突然ヒロトの持っていた石が光りだした！

「何じゃこりゃあああああ！」

ポケモン初ゲット!! (後書き)

ここで終わりです…

次回で光る石の正体がすこしだけわかります!

次もがんばるのでよろしくお願いします。

あと最後のやつ変えました。

ポケットモンスター〜輝石の蒼光〜次回もほつとけない!!

ブイゼルが喋った！？（前書き）

お久しぶりです。

なかなか投稿できず申し訳ありませんでした。

これからはがんばって投稿の間隔があかないようにするのでよろしく願います

それではスタートです！

「ブイゼルが喋った!？」

「何じゃこりゃあああああ
突然光りだした石のせいで研究所はパニックに……
と思っていたのはヒロトだけだったようだ。」

「皆大丈夫？」
ヒロトの問いに

「うん！へーき！へーき！」
と恐ろしくのんきなアスカ。

「うむ。」
相変わらず多くを語らない博士。

「……………」
ジユンは黙ったままだ。

「おいジユン！どうしたんだよ！」
「……………」

「おい！黙ってたらわかんないよ！どうしたんだ……ってこいつもし
かして気絶してるんじゃない……？」

「みただね」
「どうしよう」

「大丈夫だよ。僕が目を覚まさせるから。」

「え？今アスカなんか言った？」

「いや。いまのだけ？」

「じゃあ博士？」

「いいや違うぞ」

「じゃあいったい誰が……………！」

バツチャアアアンと大きな水音がしてまたあの声が出た。

ブイゼルが喋った！？（後書き）

以上です！

次回は石の話をしてやっところと出発するのでお楽しみに。

ポケットモンスターDPT〜輝石の蒼光〜次回もほっとけない！！

いざ出発!! (前書き)

第4話です。

なぜブイゼルがしゃべるのか少し明らかになります。

それではスタート!

「そうだ。だからヒロト！お前の父さんは今どこにいるんだ？」

「親父なら修行中だよ」

「どこで？」

アスカはヒロトの父親に興味があるようだ。

「今はわかんないけど、シンオウのどこかにいることも、無事なのも確かだ。」

「どうして無事だとわかるの？」

「だって親父、月一で家に電話くれるもん。俺は携帯も持ってるし。」

「じゃあすぐ見つかるな。」

「電話してよ。ヒロトのパパさんに。」

「いや。コトブキシティにいたら電話するよ。」

「どうして？」

「コトブキでちょっとあるからさ。」

「……？」

「何はともあれ、出発しようぜ！」

「うん！」

「じゃあ博士。いってきますー！！」

「うむ」

「それじゃあまずはコトブキシティを目指して出発だ！」

「おー！！！！」

いざ出発！！（後書き）

次はコトブキシティへ行きます。

そしてあの人も登場する！…かも。

というわけでいつもので閉めます。

ポケットモンスターDP T 輝石の蒼光 次回もほっとけない！！

初バトル！（前書き）

第5話です。

ついに初バトルです！

それではスタート！

初バトル！

「そうだ！2人ともポケモンもっ持ってんだろ？だったらさバトルしようぜ！」

ヒロトの提案に2人は

「賛成！」

快く受け入れてくれたようだ。

「じゃあどっちがくる？」

ヒロトは早速バトルモードになっている。初バトルで燃えているようだ。

「じゃあ私がやるよ！よろしくね、ヒロト」

「おう！じゃあやるか！」

「審判はどうする？」

「それならわしがやろう。」

なんと博士が審判に名乗り出た。

「博士がやってくれんですか？」

ヒロトも驚いているようだ。

「いないよりはましじゃろっ?」

「それではヒロトVSアスカバトル開始!」

「先行は俺からでいいな?」

「OK」

「よしいけブイゼル!」

「ブイブイ!」

「じゃあ私は、リオル! READY GO!」

「リオ、リオル!」

「いけブイゼル! ソニックブームだ!」

「ブイ!」

「かわして!」

「リオ」

リオルはすばやくソニックブームをかわした。

「今度はこっちの番よ。降りてきたブイゼルにはっけい!」

「リオ」

リオは素早くブイゼルの着地地点までいき降りてきたブイゼルにはっけいを命中させた。

「ブイイイイ」

「大丈夫か？ブイゼル？」

「ブイブイ！」

「よしアクアジェット！」

「ブイイイイイイイイ！」

ブイゼルは体に水をまとうとまるでジェットのようにリオルへ突進した。

「速いつ、かわしてリオル！」

「リオ！」

リオルはアクアジェットをかわしきれず吹っ飛んだ。

「すごいパワーだね。一気に体力を持っていかれた。」

「よし次で決めるぞ！れいとうパンチ！」

「れいとうパンチですって！？ならばリオルメガトンパンチ！」

両者のパンチが激突しあたりを砂埃が覆った…

「「どうだ!」「」

「リオリオ…」

砂埃が晴れるとそこには目を回して倒れるリオルの姿があった。

「リオル戦闘不能!よってこの勝負ヒロトの勝ち!」

「やったあ!ありがとうブイゼル!」

「まさかれいとうパンチが使えたとは…負けたよヒロト。」

アスカは少し悔しそうだが楽しそうに見える。

「よーしこれで勢いもつく!ついにコトブキに上陸だ!」

「「「おー!」「」」

初バトル！（後書き）

バトルシーンをはじめて書きました。難しいです…

次はコトブキで新展開！？

というわけで

ポケットモンスター〜輝石の蒼光〜次回もほっとけない！！

ついに上陸！コトブキシティ！！（前書き）

久々の投稿です。

今回もどうぞよろしくお願いします。

それではスタート！

ついに上陸！コトブキシティ！！

「ついに着いたぞ！ここがコトブキシティか」
そういつているヒロトはとてうれしそうだ。

「やっと着いたね！」

アスカは疲れが溜まっているようだ。

「はあはあ」

ジュンはひどく疲れているようでひどい息切れをしている。

「どうしたんだよ！体力ねーな。」

ヒロトがそういうと、ジュンは

「仕方が、ない、だろ。俺は、お前と、違って、運動、苦手、なんだから。」

つつかえつつかえで答えた。

そんなジュンを気遣うつもりはないヒロトはこう言った。

「俺さすぐにコトブキシティに行きたいんだけどいい？走るぜ？」

「私はいいけど、ジュンは？」

「先に行つて。後で行くから。」

「OK！じゃあ行こうぜアスカ！」

「うん！」

そういつて2人は駆け出した。

「さあ着いた。早くしないと始まっちゃうよ！」

ヒロトが珍しく焦りを見せている。

「何が始まるの？」

「後で言うから、今は2番スタジオに行こう！」

「さあ始まりました。『シンオウNOW！』今回のゲストはシンオ

ウリーグチャンピオンシロナさんです！」

女子アナの声から始まったテレビ番組『シンオウNOW!』にチャンピオンのシロナが登場していた。

「どうもお茶の間の皆さんシロナです。」

紹介されたのは金髪の大人な感じの綺麗な女性だった。

「うわっ始まつちゃったよ。」

ヒロトがスタジオに駆け込みつつつぶやいた。

「あっシロナさんだ！綺麗な人だね。」

同時にスタジオに入ったアスカはシロナに見とれている。

「本日は公開収録ということですがどうですかシロナさん、緊張とかしてますか？」

「そんなことはないですよ。」

「そうですね。では早速このコーナーから!……!」

1時間半ほどの収録が終わり、シロナが席を立つと、ヒロトが真っ直ぐシロナの元へ向かった。

「あら？何かしら？」

「僕シロナさんの大大ファンでこうして生で会うために来たんです!」

「あら嬉しいわ。君名前は？」

「僕はヒロトです。後そこにいるのがアスカです。」

「はじめまして。アスカです。」

あのアスカが緊張しているようだ。

「シロナさん！僕の夢、聞いてくれますか？」

「もちろん。何ヒロト君の夢って。」

「僕の夢はいつかシロナさんを倒してリーグチャンピオンになることです!」

そういつているヒロトの目はすごくいい目をしていた。

ついに上陸！コトブキシティ！！（後書き）

以上です。またすこし早い展開ですが暖かく見てください。
それでは以上ダンリックでした！

ポケットモンスターDPT〜輝石の蒼光〜次回もほつとけない！！

リュウジVSシロナ

「あつ兄貴じゃん!」

「あれっそういやリュウジさんって旅に出てたんだっけ。」

ここで説明が必要だろう。シロナにバトルを挑んだこの青年はヒロトの兄、リュウジである。彼もまたシンオウリーグ制覇を目指して3年前から旅をしていたのだ。ちなみ彼は17歳だ。

まだ紹介がされていなかったので紹介する。

ヒロトたちは14歳である。

この世界は小学校を出るか12歳になれば旅に出る資格が与えられる。そのまま旅に出るものもいるが中学校へ行くものも多い。

義務教育は小学生までだがヒロトたちは中学校に行き二年で中退して旅に出た。

なぜなら二年で中退する者も多く、もともと3人で決めていたからだ。

「いいわよ。久しぶりね、こんなところでバトルを挑まれるなんて。」

「じゃあやりましょう」

「ここでバトルでどうですか?」

そう言ってリュウジはコトブキ公園のバトルフィールドへやってきた。

するとたちまちシロナを見かけたトレーナー達が集まってきて人だかりができた。

「うわわ、もうこんなに集まっちゃったよ。」

ヒロトはマジかよといった顔をしている。

「当たり前でしょ!あのシロナさんがバトルをしようとしているん

だから。」

そういつているアスカの目はアニメだったらキラキラと輝いている絵が飛び込んでくるだろう。

「おーい」

遠くから声を掛けてきたのは前回ほぼ空気のジューンだった。

「おう！もう大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない。（キリッ）」

死亡フラグの代表的台詞を言いながらジューンは答えた。

「あつもう始まるっぽいよ。」

「シロナさん。ルールは3対3で先に全体戦闘不能になったほうの勝ちってことでいいですか？」

「いいわよ。早くやりましょ。」

「行きます！行け！ラムパルド！」

「パルド！」

「へえラムパルドかあ。じゃあ私はミカルゲよ！」

「カゲエ……」

「先行は僕でいいですね。行けラムパルド！じしんだ！」

ラムパルドが大きく吼えると地面が揺れ地面に衝撃波が走り、ミカルゲを襲った。

「かわして！」

しかし大きな石に縛られているミカルゲは動きが遅くかわしきれず衝撃波を食らった。

「なかなかのパワーね。今度は私の番よ！ミカルゲあくのはどう！」

「カゲカゲエ！」

ミカルゲの体から黒いオーラが現われ、それを周りに放った。

「かわせるか？ラムパルド。」

「パルド！」

しかしラムパルドも動きが遅くあくのはどうを食らった。

「なんて威力だ。こりゃ早めに決めたほうが良さそうだな。ラムパ

ルドもろはのずつき！」

「パルドオオオオ！」

またラムパルドが雄叫びを上げると頭が光りだし、そのままミカルゲに猛スピードで突進をしてきた。

「シャドーボールでとめて！」

ミカルゲはシャドーボールをラムパルドに放つが、ラムパルドはそれを物ともせずミカルゲにぶつかった。

ミカルゲはそのまま目を回して倒れてしまった。

「まずは一体目です。」

「やるわね。でも次は、この子よ！ルカリオ！」

「ハアアアアア」

「ルカリオですか。ラムパルドじしん！」

また地面に衝撃波が走り、ルカリオを襲った。だが！

「斜め前へジャンプ！」

ルカリオは斜め前へジャンプして衝撃波をかわしつつ空中でラムパルドの上にいる。

「波動弾連射よ！」

空中のルカリオはラムパルドの背中に波動弾を3発打ち込んだ。

「ああラムパルド！」

ラムパルドも戦闘不能になっていた。

「くそっさすがチャンピオン。うまい攻撃をしてくる。」

「ありがとう。バトルで手は抜きたくないの。」

「そうですか。僕も本気でシロナさんとバトルできて嬉しいです！

僕の二体目はバシャーモです！」

「シャーモ！」

「行けバシャーモ！ブレイズキックだ！」

「速いわね。ルカリオ受け止めて。」

「ハアアアアア」

ルカリオは手に波動を集中させてブレイズキックを受け止めようとしたがバシャーモのブレイズキックの威力は高く、ルカリオはブレ

イズキツクを食らってしまった。

「鋭いキツクねルカリオのガードを破るなんて。でも！ルカリオはピンチなるほど強くなるのよ。ルカリオ、気合いパンチ！」

「ならこっちは炎のパンチだ！行け！」

両者のパンチが激突し土ぼこりが周りを覆った視界がはれるとそこにはどちらも戦闘不能になっているルカリオとバシャーモの姿があった。

「ルカリオまで倒すなんて。あなた相当の腕ね。」

「ありがとうございます！最後まで楽しませよう！」

「そうね。思いっきり楽しませよう！私の最後のポケモンはガブリアスよ！」

「ガブリアス！」

「やっぱりガブリアスだ。なら僕は長年の付き合いのこいつだ！行けマニニューラ！」

「マニニューラ！」

「さあ行きましょうか。」

「はい！」

リュウジVSシロナ（後書き）

完結は次回になります。

ってゆうか2戦目って5話目と一緒にじゃね？

というわけで！

ポケットモンスターDPT〜輝石の蒼光〜次回もほっとけない！！

決着！ そして新しい仲間！（前書き）

リュウジVSシロナ完結と新しい仲間登場の回です。

それではスタート！

決着！ そして新しい仲間！

「マニユーラ、先手必勝だ！ れいとうパンチ連打だ！」

「マニユ！」

マニユーラは素早くガブリアスの懐に飛び込むとれいとうパンチを連打しようとしたがパンチを出したときには既にガブリアスはそのにいなかった。

「なかなか速いわね。でもガブリアスのほうが上みたいね！ ガブリアス、ドラゴンダイブ！」

「グオオオオオ」

ガブリアスは空中から風のようにマニユーラへぶつかった。

「ニャアアアア！」

マニユーラはドラゴンダイブをかわせず吹っ飛ばされた。

「くそ、マニユーラのスピードでも太刀打ちできないのか！？ 強すぎる……」

「これで決めさせてもらおうわ！ ガブリアス、ギガインパクト！」

「ギアアアアアア」

ガブリアスが雄叫びを上げるとガブリアスをオーラのようなものが包み、そのままマニユーラへ突進した。

「頼むかわしてくれ！ 頼む！」

「ニユウウウウウ」

マニユーラはさっき以上のスピードを発揮して何とかギガインパクトはかわせたがギガインパクトの衝撃は凄まじく、マニユーラは吹っ飛ばされてしまった。

「立て！ 立つんだ！ 立つてくれ！」

「ニユウ…ラア…」

何とかマニユーラは立ち上がった。

「よし。これが最後の攻撃だ！ れいとうパンチ！」

マニユーラはギガインパクトの反動で動けないガブリアスへ渾身の

「超元気なんですけど。」
空気第一号候補ジユンは呆れている。
「私のはなんだったのよ!」
アスカは少し怒っているようだが問題ないだろう。
完全に脱力してしまった二人をおいてヒロトはシロナとリュウジの元へ向かった。

「シロナさん! 兄貴! すごいよ! あんなバトルは初めてだよ! すごく興奮した!」

「あれヒロト君、見てくれたの?」

「はい! しっかり見てました! 勉強することが多すぎて困りました。」

「じっくり見てましたよ。もしかしたら瞬きしてなかったかも。」
「おうアスカちゃんじゃないか! もうこんな大きくなったのかあ3年って長いなあ。」

もう年寄りのせりふを言い出したリュウジにヒロトは

「兄貴もすごいじゃん! あのシロナさんといいバトルするなんてさ! まあ負けたけど。」

「最後のは余計だよ!」

「リュウジさん、ほかのポケモンも見せてくれませんか?」

「久し振りだね。ジユン君、君もだいぶ変わったね。えっとポケモンね、はいはい。ただいま…」

「よし出て来い!」

するとさっきの三体とそのほかに三体のポケモンが出てきた。

「左からバシャーモ、ラムパルド、ボスゴドラ、フーデイン、ムウマージ、マニニューラだ。」

「ほかのポケモンもよく育てられているわね。」

「ありがとうございます。じゃあ僕はこれで失礼します。」

「もう行っちゃうのかよ。」

「負けちまったんだから、また修行しなきゃな。じゃあまたな！」
「じゃあねー！」

「ところでヒロト君、私のあげたポケモンはもう見てくれたかしら。」

「まだです。せつかくなんで今出してみます。」

「楽しみだなあ」

「ってちよ、いつの間にポケモンなんてもらってんの!？」

「まあまあいいじゃない」

「シロナさんがそういうなら……」

「それじゃあ行きますそれっ！」

「がうがう」

「フカマルだ！やったやった！ありがとうございます！」

「ヒロトは昔からフカマルほしがってたもんな。おめでとう！」

「ありがとうジュン！シロナさんもしかしてこのフカマルってあのガブリアスの卵から生まれたフカマルなんですか？」

「察しがいいわねヒロト君。そのとおりよ。あのガブリアスの子供といったところね」

「うわあのガブリアスの子供なのか。すごいなお前！」

「ヒロト、この子に名前を着けたら？」

「アスカがそう提案すると」

「いいじゃんそれ！うーん何がいいかな……そうだ！ガイアってのはどうよ！」

「賛成だ」

「私も」

「私も賛成ね。大事に育てて頂戴ね。」

満場一致でこのフカマルは晴れて『ガイア』と名づけられた。

「よろしくなガイア！」

「がうがう!」

決着！　そして新しい仲間！（後書き）

次回はバトル大会を開催します！

ガイアの初バトルと久々の登場ブイゼル君です。

ということ以上ダンリックでした！

ポケットモンスターDPT〜輝石の蒼光〜次回もほっとけない！！

ガイア初バトル！（前書き）

お久しぶりです。

今回はブイゼル君久しぶり登場とガイア初バトルの回です！

それではスタート！

ガイア初バトル！

「いだだだだだだっ」

この日の朝はヒロトの悲鳴から始まった。

「わわわっ何だあ!？」

ヒロトの悲鳴を聞いたジユンが飛び起きた。

「こらガイア痛いだろ!耳をかじるなっ!」

「なんだヒロトか。仲がよろしいこったね」

「んなこといつてないで助けてよ」

「すやすや…」

そんな2人の会話を物ともせず眠るアスカ。

「だあ!やつと外れたよ…あー痛かった。」

「がうがう!」

「まったくもー」

「仕方がないだろ。まだガイアは赤ちゃんみたいなモンなんだよ。だからヒロトと遊びたいのさ。」

「そっなの?」

「がうがう!」

「そうかそうか!良しじゃあ朝ごはん食ったら遊んでやるからな!」

「行けリオル!メガトンパンチ!ムニヤムニヤ」

「アスカってさこんなに寝るやつだっけ?」

「「「ごちそうさまでした!」」」

「良し!じゃあガイア遊ぼうか!」

「がうがう!」

「ストップ！その前にさ、俺達のポケモンをガイアに紹介しておきたいんだけど」

ジュンの提案にアスカは

「賛成だよ これから一緒にいるんだもんね。」

「俺も同じく賛成だよ」

ヒロトも快諾した。

「まずは俺からだな。出て来いグレッグル！」

「レッグ！」

「じゃあ次は私ね。リオル！」

「リオリオ！」

「最後はブイゼルだ！」

「ブイブイ！」

「どうだガイアこいつらがお前の仲間達だ」

ヒロトはガイアにあわせてしゃがんで話している。これが彼なりの接し方なのだろう。

「がうがう！」

「ガイア、嬉しそうね」

そういつているアスカも嬉しそうだった。

「おい！」

「気に入ってくれたな！よかったよかて」おーーい！！！！」

「ビックリしたあ。どうしたのブイゼル？」

ヒロトのせりふをかき消すほどの大声を出したブイゼルはキレているようだ。

「何でだよ！ボールからなんで出してくれねーんだよ！リュウジとシロナのバトルすげー見たかったのにさあ、あと俺ってしゃべれるんだからもつと活用しようぜ！それにsry」

「要するに何が言いたいの？」

マシンガンのようにしゃべるブイゼルのせりふを今度はヒロトが制した。

「俺をボールから出して旅するってのはどうだい!」

「なるほど…ジュンはどう思う?」

「いいんじゃないかな。でも人前でブイゼルにしゃべられるのは困るけど。」

「アスカはどう?」

「賛成ね。もっと賑やかで楽しくなっていていいじゃない!」

「だってさ。」

ドヤ顔のブイゼルにヒロトも

「じゃあブイゼルは基本ボールから出すことにするよ。」

「頼むぜ!」

「さあやっとならとブイゼルと遊べるな。ん?どうした?」

ブイゼルはすぐ近くでやっているバトルに釘付けになっている。

「ブイゼルはバトルをやってみたいんじゃない?」

アスカがそういうとヒロトはハツとしたようにブイゼルに言った。

「そうなのか?」

「がうがう!」

「わかった。じゃあやってみるか!」

「さて相手はどうしようか…」

「リオルやグレッグルじゃあ強いよね…」

ヒロトとアスカが困っているとジュンが

「無理にトレーナーと戦う必要はないんだ。野生のポケモンでも十

分に練習にはなると思うよ」

「なるほど」

「じゃあそうだな…あのビッパでどう?」

「OK!ブイゼルいけるな?」

「がうがう」

「ねえガイアの技を確認したほうがいいんじゃない？」

「そうだな！サンキューアスカ」

「なになに…体当たり、りゅうのいかり、じ、じしん！？マジかよ！？」

「この子じしんが使えるの！？」

「予想ガイです」

「なにいつてんだよ驚きすぎておかしなこと言ってるぞ」

「とにかくやってみよう。ガイアじしんだ！」

「ドキドキ…」

「があああう！」

「あれ？何も起こらないよ？」

「もしかしてまだ子供だからじしんが出せないんじゃない？」

「なんだそうだったのか。でもいつかは使えるようになるうな！」

「ヒロトって親バカ？」

「さあ気を取り直して、ガイア！たいあたり！」

「がう！」

ガイアは親譲りのスピードでビツパに体当たりをかました。

「続いてりゅうのいかり！」

「がああああ！」

ガイアの口から光線が発射され、ビツパに直撃し、ビツパは逃げた。

「やったなガイア！俺達の初勝利だ！」

「がうがうがう！」

「やっぱり親バカだと思わない？ジユン」

「僕もそう思う。」

ガイヤ初バトル！（後書き）

次回こそバトル大会を開催するので待っててください。

あとブイゼル君ごめんね。

ということ以上ダンリックでした！

ポケットモンスターDPPT〜輝石の蒼光〜次回もほつとけない！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3736w/>

ポケットモンスターDPT ~輝石の蒼光~

2011年11月28日23時53分発行